

▼書評

芝健介著 『武装親衛隊とジエノサイド 暴力装置のメタモルフォーゼ』

(有志舎、二〇〇八年六月、二四七頁、二四〇〇円＋税)

原田一美

ホロコーストがなによりもまず親衛隊（SS）の犯罪であったことは周知の事実であろう。だが、戦後、一般の人びとの間では「武装親衛隊神話」が大きな影響力をもっていたという。これによれば、武装SSは、SSとは別の組織であり、陸海空三軍と並ぶ「第四の国防軍」を構成していた、したがって、武装SSはホロコーストとは何の関係もないというのである。著者による『武装SS——ナチスもうひとつの暴力装置』（講談社、一九九五年）は、武装SSがどのような組織であったのか、どのような行動を行ったのかを明らかにすることによって、「武装親衛隊神話」を解体しようとする試みであった。

本書は、この『武装SS』のいわば続編とも言うべきもので、一部前著と重複している内容もある（第一章・第二章）が、とりわけ、武装SSのホロコーストへの関与を明らかにすること（第三章・第四章）、および武装SSの複合的全体像を明らかにすること（第五章）を課題としている。

まず簡単に内容を紹介しよう。

第一章では、SSの成立・発展、親衛隊員に要求された「忠誠」、「服従」、「戦友愛」の内容、さらにSSの行動原則が示された後で、武装SS

SSの成立過程が叙述されている。

武装SSは二つの組織的起源をもっている。まず、ヒトラーの「特別衛兵隊」および一九三三年春に左翼の内乱準備を粉砕するという名目で設置された「治安予備隊」である。これらの部隊は、三四年九月以降、武装特務部隊三連隊へと発展し、ここでの服務は兵役と同等扱いはれることが承認され、また訓練の際には国防軍の協力も得られるようになった。もう一つの起源は、強制収容所監視部隊の武装化から生じたものである。この部隊は、三六年にSS髑髏部隊として公式に承認された。これら二つの起源をもつ諸部隊は、三八年以降、外征部隊としての性格も獲得することになり、三九年五月には師団編成が認められ、軍事組織として正式に承認されることになった。以上のようなプロセスを経て成立してくる武装SS——この言葉は、三九年一月二十九日のSS命令に初めて登場したという——は、戦争勃発後、拡大の一途を辿っていくことになる。

第二章では、これまで歴史研究は「世界観教育のメカニズムと中身について、特殊組織的な分析を十分なしてはこなかった」（五九頁）という認識から、武装SSをも含むSSでの世界観教育に焦点が当てられている。SSが本格的に世界観教育に乗り出したのは、一九三六年初めであるが、そこにおいて中心的役割を占めていたのは、反ユダヤ主義であり、しかも一般に反ユダヤ主義の鎮静化が見られたとされるこの年ですら、ユダヤ人問題のラディカルな解決方法をめぐる議論が行われていた。たとえば、世界観教育用の学習資料には、以下のように書かれている。「ユダヤ人は寄生虫であり、ユダヤ人が栄えるところ他の民族は死に絶える。……ユダヤ人に講和の条件を課してはならず、我々にゆるさされているのは彼らを滅ぼす慈悲の一撃のみである」（六三三頁）。

武装SSの世界観教育は、軍事指揮・訓練と世界観学習という二元的体制で行われており、この点で軍の伝統とは異なっていた。ただし、一九四〇年以降は、部隊指揮官の権威を強化するために、この二元シテムを克服しようという試みがなされた。「世界観教育は週講演のみにとどまらず、常にいたるところでおこなわれなければならない。執銃教練、武器操作訓練同様、欠かさず、集中して、厳格に実行されねばならず、思惟と行動は絶えずわれわれの世界観の原則に合わせられなければならない」(八六頁) というのである。目標は「政治的兵士」であった。

第三章は、独ソ戦開始後のユダヤ人大量虐殺の状況、とりわけ武装SSによるその関与の叙述に当てられている。ホロコーストが開始していく過程は五月雨的な漸次的プロセスであったが、ソ連在住ユダヤ人を皆殺しにするという実践が一九四一年八月に始まったことは確かだという。その際、武装SSとSS司令幕僚部の二旅団の投入が決定的に重要であった。この章ではまた、ホロコーストにおける国防軍とSS・警察との協力が強調されている。「武装SSによるソ連ユダヤ人絶滅政策は、その本格的開始後二カ月後には、ドイツ国防軍の戦争政策にもなっていた」(二二三頁) のである。

第四章では、武装SSによるもう一つの犯罪、つまりガスの開発および人体実験が取り上げられており、武装SSに所属する医師たちが、人体実験ばかりかガス殺装置の開発にも関与していたことが示されている。SSの医療衛生組織とは別に、武装SSにも独自の医療衛生組織、さらには検疫研究所が備わっており、ガス殺装置の開発は後者によつて行われたという。

第五章では、武装SSの複合的全体像を明らかにするための議論が行われている。ここで強調されているのは、SSが、伝統的に軍と警察

——国家による暴力独占のメダルの両面——に与えられた機能をはるかに超える役割をめぐしていたということである。ヒムラーはSS全体の構想を頻繁に「ナチ党国家防護団の創出」という言葉で表明していた。それが果たすべき役割は、(1) 国内の敵撲滅たる警察的任務、(2) 人種および民族性の防護、(3) 軍事的対外膨張である。著者によれば、ヒムラーは一種のポリタリー(ポリリス+ミタリー)を構想していたのであり、このことの意味は、軍・警察の混在機能化というコンテキストの中で再考することが必要だという。

武装SSに関して言えば、野戦部隊として戦うだけではなく、たとえばポーランドでは、ゲッターの解体、ユダヤ人の大量射殺、絶滅収容所への強制移送、ガス殺など、実に多面的な行動を行っていた。このような世界観的ポリタリーとして武装SSの「多価性」が強調されている。

以上のように、本書は、武装SSのホロコーストにおける現場の具体的な行動を明らかにするとともに、SSあるいは武装SSの歴史を二〇世紀における軍・警察の発展の中に位置づけようとする試みである。だが、評者のような、SSや武装SSについての門外漢の目から見ればわかりにく部分もないわけではない。そこで、次にそのような問題について触れてみたい。

まず第一に、武装SSを一般SSと分けて考察することの意味という問題である。本書は、「武装SSの歴史的定位置」を課題としているが、武装SSはSS全体の一部にすぎない。たとえば、第一章、第二章で取り上げられた「モラル」や「行動原則」、「世界観教育」といった場合、基本的には、SS全体に言えることがらが叙述されており、武装SSだけに当てはまることは問題にされていない。

「武装SSのホロコーストへの関与」について言えば、武装SS第一

旅団やSS騎兵連隊がすでに一九四一年七月末からあらゆる年齢幅のユダヤ人を男女の別なく殺害していたことが指摘され（一一三頁）、この事実によってヒムラーは絶滅政策をさらに具体化・推進していくという認識を得たのだとされている（一一八頁）。また、ポーランド・ユダヤ人の絶滅を目的とした「ラインハルト作戦」についても、この作戦に再三再四武装SSの諸部隊が動員されていたことが強調されている（二七七頁）。たしかに、ホロコーストといえは、これまで行動部隊や警察大隊などが主として研究の焦点になってきたので、武装SSの関与を強調することは、とくに「武装親衛隊神話」を念頭におけば重要だと言えるだろう。だが、ホロコーストがなによりもまずSSの犯罪だったとすれば、武装SSがそれに関与したというのも当然のことのように思えるのである。

同じことは、「医師の犯罪」についても言える。たとえば、ツィクロンBと武装SSとの関連を示すために、その保健局衛生部に所属したクルト・ゲルスタイン武装SS中尉の例が挙げられている。彼は、国防軍、捕虜収容所、強制収容所のための消毒装置、防疫給水装置の開発に従事し、さらにアウシュビッツにツィクロンBを送る仕事を行ったというのである。とはいえ、ゲルスタインはまずSSに入隊し、その後武装SSに入っている。そもそもSS隊員であることと武装SSのメンバーであることの間には、どれほどの違いがあったのだろうか。

ヒムラーは、多様な部隊や施設の複合体へと膨れあがったSSについて、これらすべての分枝がつねに全体の一部にすぎないと感じるように配慮しなければならないことを強調していた。^①「世界観的ポリタリーとしての多機能性」は、まさにSS全体に当てはまることではないのだろうか。本書では、SS全体のことと武装SSに関することが混在してい

て、わかりにくくなっていることが残念である。

第二に指摘したいのは、武装SSと国防軍との関係である。そもそも「武装親衛隊神話」は、二つの神話を前提にしていた。第一に武装SSはSSとは別組織であって、「第四の国防軍」であるという神話、第二に「国防軍神話」である。この二つの神話が共に崩壊した——後者は「国防軍の犯罪」の指摘によって解体された——現在、それでは、武装SSと国防軍との関係はどのように考えればよいのだろうか。

本書では、「軍とSSの対立の面のみを強調する見方が、……軍の犯罪行動を従来どれほど隠蔽する方向に作用してきたか」（八五頁）として、両者の協力の側面が強調されている。たとえば、一九四一年七月後半に行われた「プリピャチ沼沢地帯掃討作戦」では、国防軍とSS・警察の協力ぶりが如実に示されている。中央軍背面地域司令官シエンケンドルフは、SSとの協議に直接参加し、投入地域命令をSS騎兵旅団に発し、旅団の指揮官たちに勲章を授与したという。また、ツヴァイエルではSS第八歩兵連隊による大量射殺に陸軍の兵士も積極的に参加していた。

他方で、兵員補充をめぐる武装SSと軍の競合・対立は結局、暴力の複雑化ないし複合的暴力の野蛮化をもたらしたとも指摘されている。さらに、独ソ戦突入後は次第に国防軍のナチ（的世界観）化をも引き起こしたという。

SS（あるいは武装SS）と国防軍の競合・対立の側面と協力の側面、さらには軍のナチ化による両者の融合ともいべき側面。これらの側面はどのような関係にあったのか、またその関係はどのように変化していったのか。本書で示唆されているような、SS・警察と国防軍のあいだの非常に複雑な関係をより具体的に明らかにしていくことは、今後

のナチズム研究の重要な課題の一つとなるだろう。

この問題以外にも、本書では、ナチズム全体やSSに関する今後の研究の指針となるような指摘や示唆が数多く含まれている。たとえば、SSの機能に関するヒトラーとヒムラーの見方の相違や、SS・警察高権指導者の重要な役割についてなどである。本書を手がかりとして、このような問題についての研究が進むことを期待したい。

(1) Peter Longenich, *Heinrich Himmler. Biographie*, München 2008, S.265f.

(はらだ かずみ・大阪産業大学教授)